

「万葉ラブストーリーリーコンテスト」第四回応募作品

# 「力車と蘭陵王」

佐藤 良士

蘭陵王  
一人舞



登場人物

大西透 八十歳、老人ホーム「わかくさ苑」入居  
山本修平 大学生 二十四歳  
川口ゆき わかくさ苑の介護福祉士、二十四歳  
久子 大西の妻、故人、回想で登場

老人ホーム「わかくさ苑」正門、玄関

建物の中から、BGM系の音楽が聞こえてくる。

「わかくさ苑」、休憩ルーム（午前）

大西透（八）がテーブルでお茶を飲んでいる。

テーブルの上に置かれている二通のはがき。

一通は奈良の私立大学の「新春雅楽公演」の案内状。

一通は年賀状で

多摩川に さらす手作り さらさらに

なにぞこの児の ここだ悲しき

東歌 （巻十四の三三七三）

と、達筆で万葉歌が書かれている。

同

大西が年賀状を手に取り、あて先面を見る。そこには

「配達先不明」の郵便客の印が押してあり、「東国 多摩川

杉本久子様」と書いてある。

ゆきの声「あ、それ、大西さん行きはるんですか」

わかくさ苑・休憩ルーム

大西の後ろに介護福祉士の川口ゆき（二四）がいる。

ゆき「（案内状を指差して）その新春雅楽の案内状、それ、うちの大学の雅楽部の公演なんですよ」

大西「そつや、ゆきちゃんはこの大学を出たんやったな」

ゆき「今年は舞楽で蘭陵王をやるんですよ」

大西「ふーん、随分と詳しいんやね」

ゆき「でも、どうして大西さんとここに案内状が来てるんですか」

隣の席で、テレビを見ていた老婦人が口をはさむ。

老婦人「あなたは新しいから知らないわね。大西さんが雅楽の横笛

の名人だつてこと」

同・庭（午後）

散歩する大西とゆき。大西は左半身が不自由で、杖をついてゆつくりと歩いている。

ゆき「そうやつたんですか。大西さんが春日大社の雅楽部におられたなんて知りませんでした」

大西「笛を吹くこと以外、何の能力も無いからね」

ゆき「素敵やと思います。一生、一つのことを打ち込めたやなんて」

大西「それで、ゆきちゃんのほうはどうなんや」

ゆき「どうって何がですか」

大西「さつき言うてた、ほらボーイフレンド、雅楽部なんやろ」

ゆき「一応、蘭陵王を舞うことが夢なんです」

大西「へえ、それはすごいやないか」

その時、携帯がなる。メールを見て、大西に「あ、スミマセン」と言つて、建物の中にゆきが走り去る。

同、玄関横のベンチ（夕方）

並んで腰掛ける大西とゆき。ゆきは帰り支度でオーバーコート、大西もコートを着こんでいる。

ゆき「それが、アカンのです」

大西「なんでや」

ゆき「五年も大学の雅楽部に居たけど、結局は裏方ばかり」

大西「五年も、一年余分やなあ」

ゆき「落第したんです。今年もまだ就職決まってへんし、ホンマ涙

えへん男なんです」

大西「ふーん、就職出来へんかったら、結婚も出来へんなあ」

ゆき「結婚なんて、まだまだですわ」

その時、門の外に、車夫姿の若者が人力車を引いてやってくる。門のところでは止まると、ゆきに向かって「オーイ」と手を振る。

大西「（驚いて）あの力車、ゆきちゃんのボーイフレンドと違うか？」

人力車の後ろに自動車が出来て、クラクションを鳴らされ、あわてて若者は人力車を道の端に寄せる。

ゆき「ええ、アレです。ホンマ、何やっても涙えへんですわ。ほな、大西さん、さよなら」

ゆきが大西に手を振つて、若者のところに走って行き人力車に乗る。若者は大西に頭を下げると人力車を引いて走り去る。笑いながら見送る大西。

わかくさ苑の休憩ルーム(夜)

大西が一人で万葉歌の書かれた年賀状を手に取り、見つめて  
いる。

久子(声)「あなた、初めてね、私に年賀状を書いてくれたの」

奈良・猿沢池畔

車夫の山本修平(二四)が大西を人力車に乗せている。

奈良の町を走る人力車

人力車の上から、嬉しそうに周りの風景を見る大西。

興福寺、登り大路、東大寺、公園で遊ぶ鹿の群れ、春日大社、  
高畑界限、奈良町界限、そして、

奈良町・大乘院庭園文化館

入り口のところに入力車が置かれている。

文化館前の楽人長屋土塀

土塀に古代の楽人のイメージが重なる。(例えば飛鳥の県立万  
葉文化館の休憩所壁面の楽人のイメージ画)

同、中

庭を見ながら、休憩する大西と山本。

大西「西の京の薬師寺の塔、あの塔のテッペンの水煙に天人が居た  
はるの、知ってるか」

山本「はい、見たことがあります」

大西「若い頃は、ワシも下からあの天人が見えたんやけどなあ。青  
空の中の天人を見るたんびに、天人の音楽がワシの頭にひびいて、  
何とかあれを自分の笛で吹いてみたい、天国の調べを吹いてみた  
い、そう思て、一生かけたけど、そやなあ、やっぱり天人を越え  
ることは出来へんかったなあ」

山本「何となくわかるような気がします」

大西「蘭陵王を舞ってみたいひんか」

山本「(驚いて)えっ、僕が?!」

大西「そつや、夢なんやろ」

舞楽・蘭陵王の映像(イメージ)

舞楽の舞台。

蘭陵王が、一人勇壮に舞っている。奏者の姿は見え、横笛  
の伴奏がBGMのように聞こえている。

その伴奏が低くなって

大西の声「蘭陵王は、唐楽の舌越調の一人舞やったなあ」

山本の声「はい、華麗な衣装の走り舞です」

大西の声「最初は小乱声（こらんじょう）で、竜笛の独奏」

山本の声「この時に舞人が登場します」

大西の声「それから陵王乱序（りょうおうらんじょ）、これは竜笛と打物が波のように響き合う」

山本の声「激しく、豊かに、鳳凰のように舞います」

横笛の伴奏が高くなり、また低くなる。

### 道（夜）

山本が早足で歩いている。後をゆきが小走りに続いている。ゆき「こんな時間に蘭陵王を舞うって、どういうことよ？」

無言で歩く山本。再び、横笛の伴奏が高くなって

### 公民館の集会場のような所（夜）

小さな舞台があり、客席側にゆきが一人で座っている。

大西が普段着のまま舞台に座って、横笛を吹き、山本が蘭陵王の衣装を着て、舞台で舞っている。

驚きの目で見つめるゆき。

低く、高く、なめらかに、激しく見事な音色を響かせる大西の横笛。それに引きずられるように舞う蘭陵王の山本。

再び、横笛の音が、遠ざかって

久子の声「あれは、あなた？。あの蘭陵王はあなたなの」

大西の声「いや、あれは私やない。でもあの衣装はお前が縫ったものだよ。お前が私のために縫ったものだ」

久子の声「ウソ、あなたは約束したわ。私の命が終わる時、私のために蘭陵王を舞ってやると。蘭陵王を舞うことは、若い日のあなたの夢だった。だから私、縫いましたのよ。私の命が終わるまでに、そして、私はそれを仕上げましたわ」

大西の声「そう、お前はあれを縫いあげて。でも、私は舞えなかった。私が舞えばお前の命が尽きてしまう。そんな気がして、とても私は舞えなかった。そして……、お前は私の蘭陵王を見ることなく旅立ってしまった……」

再び、高まる笛の音。客席で一人見つめるゆき。笛の音が再び遠ざかって

ゆきの声「……修ちゃん、蘭陵王を舞っている……。私のために……、私だけのために……。いいよ。修ちゃん、結婚してあげるよ」

わかくさ園。大西の部屋の扉。

「東国に旅行してきます」の張り紙が貼ってある。

新幹線

走る。

多摩川の上流

に佇み、川を眺める大西。

手に持った大西の年賀状八ガキが風に舞って、舞い上がる。  
道に落ちた年賀状を拾いあがる老婦人。

久子である。大西に笑いかける久子。

久子「あなた、来てくれたのね。私のふるさとへ、そして私とあな  
たが出会った場所。はい、ご褒美。これは私の年賀状」

久子の年賀状

やわらかな女性の文字で万葉歌が書いてある。

庭に立つ 麻手刈り干し 布さらす

東女を 忘れたまうな

常陸娘女 (巻四の五二一)

「了」